

実践高校

「誰一人取り残さない交流」をめざして ～生徒の好奇心がこの社会の Well-being を創る～

清水 弥生 (しみず・やよい 山口・山口県桜ヶ丘高等学校)

はじめに

私は、「非認知能力」における「英語科の学ぶ力」とは、『「好奇心をもつ」⇔『相手に問いかけようとする』⇔『やりとりしたい意欲が呼び起こされる』というループ』と結論づけました。2022年にオンラインでの交流を行い、そこで積極的に参加する生徒の姿を見た結果です。

2023年度6月、オーストラリアの姉妹校との交流が再開されると校内で公式に発表があり、中3～高2の30人、先生3人が来校し、2泊3日でホームステイすることを知りました。

今年は実際に会うことができます。学んだ英語を実際に「生で」使う機会がやってきました。

オーストラリア姉妹校との交流

昨年度・今年度と探究の時間を企画・実施する担当者をやらせていただいています。姉妹校との交流を探究の時間に行い、さらに英語科と連携させることを考え、校内の協力のもとで実施しました。

〈準備〉

1. 探究の時間の内容：

第1学年の目標：具体的な体験をととして、好奇心を引き出し世界の課題に関心をもたせる。課題について、協働的な探究活動をすることにより多様な角度から俯瞰して捉えることができるようにする。

そのため、5月から、DEAR（開発教育協会）の参加型ワークショップを実施後、ルワンダ（これのみオンラインで義肢制作について）、アメリカ・中国・スペイン・韓国の方々に、各国の良いところ、改善すべきところをお話いただいた。最後に学校全体の講演会でインドの日本語学校校長のお話をそれぞれ日本語でしていただいた。その際の生徒の振り返

りには各国の特徴の記述や「行ってみたい」という言葉があった。

2. 姉妹校と交流のための英語科の準備：

探究の時間の交流に、「誰一人取り残さない自己紹介大会」とタイトルをつけた。文字どおり、どんな認知特性をもつ生徒も一人残らず、平易な英語でコミュニケーションが取れる実感をもってもらうことをねらっている。内容は「英語コミュニケーションⅠ」または「論理・表現Ⅰ」で学んでいる単元のものを使用する。

① スライド2枚（30秒で言う）を作る

- ・1枚目：名前など教科書の最初の方にある自己紹介のパターンを使用。
- ・2枚目：教科書の各単元の自己表現のパターンを使用する。

② “Permission to Dance”（BTS）

歌は、7人のパートに分け、自分のパートだけを歌う。ダンスの一部（手話）だけ練習、全員で手話をする。各パートがわかる YouTube 動画*を使用する。一体感を楽しむのが目的。

③ 姉妹校の生徒の準備を出発前に依頼

- ・学校紹介のスライド：代表者によるオーストラリアについてのクイズ
- ・個人：学校生活などを紹介するカードなど各自1枚を作成してくる（日英どちらでも可）。

〈交流当日〉

- ① 豪側あいさつの後、豪代表者によるクイズ。
- ② iPad を使って、自己紹介。
- ③ 歌と手話の部分のダンス。

7クラスを解体し、6グループに分け、できるだけ同じクラス同士にならないように組み合わせて列を作る。2列になり、片方だけが移動して、パートナーを変えていく。それぞれの列に1～2人の



交流風景



生徒のスライドより（原文のまま）

姉妹校生徒が入るようにする。

私は MC の役で “Start, stop, switch, stop, find your new partner.” を繰り返します。一人の時間は 30 秒をキープしました。また、前準備として、エクセルで表を作り、あらかじめ各クラスに配布、並び方を予習してから、当日に臨みました。

〈生徒の感想（今後に向けて）〉

- ・緊張してしまい、コミュニケーションがとれなかったので来年はとれるようにしたいと思う。
- ・意外と聞き取れた。自信につながった。
- ・いろいろな人と交流してみたい。
- ・寿司を紹介したのですが、ベジタリアンの方について、自分が理解のない酷い人間のように相手に映ったのではないかな？
- ・キャセドラル学園の生徒さんと、日本との違いが沢山あった。また、会ってみたいです。
- ・日本語が苦手と言っている人もいることに驚いた。だから、日本語ができるから留学する方法、日本語が苦手だけど学びたいから留学する方法などさまざまな方法があると思いました。

振り返り

生徒のみならず、姉妹校の引率教員からも好評の活動になりました。

日本人同士となって、不満を漏らす生徒もいたが、

それでも、「いろんな考えをもっていることがわかった」という気づきがありました。

また、教科書の内容を使い、単元の評価につながるようにしました。私のクラスでは、iPad の Keynote でプレゼンテーションを作り、AirDrop で私の MacBook Air に提出してもらうことにしています。

この活動の結果、「『好奇心をもつ』⇔『相手に問いかけようとする』⇔『やりとりしたい意欲が呼び起こされる』というループ」が存在すると感じました。さらに、生徒はまずやるべきことを理解し、自分には何ができるかを認識し、理解したことを使い、どのように相手と関わるか、を学ぶ体験をしたと考えます。代表者だけが英語で話をするのではなく、英語のテストの点がいい悪い、なども関係なく、全員が自分のスライドを相手に見せながら、話し続けたのです。

この先どうするのか

今回、好奇心をもち、相手と関わり、それが楽しい、相手と英語で話を通じて満足することを味わいました。それが、自分への自信となり、また、次もやってみよう、という気持ちになっている生徒がいます。単純な英語のやりとりでも iPad に全員がスライドを作っていることを確認する作業、英語で発音できているかを聞く作業、など 200 人を超える生徒ができるようにするのは数時間を要しました。しかし、準備して当日を迎えたとき、感情のコントロール、他人との協調、主体性、自己肯定感などのようなライフスキルを使って、日本人同士、またはオーストラリアからの生徒と、英語で自己紹介をし続けることができたと考えています。

〈参考文献〉

- 岡崎大輔 (2023) 『親子も楽しめるゆるめる子育て』 明日香出版社。
- ポール・タフ (2017) 『私たちは子どもに何ができるのか』 英治出版。
- 『教室の窓』 vol.70 2023. 9, 東京書籍。
- * “Permission to Dance” (BTS) の動画：

